「ベルリン国際映画祭 若手日本人監督海外プロモーション」

参加レポート

草場尚也

本事業を経験して、海外との国際共同制作への意欲がより高まりました。映画という共通言語さえあれば、国境や文化、言語の壁を越えることができるという期待感を持てる出会いが多くあったのです。私は初めて、海外映画祭のマーケットに参加したのですが、ベルリン国際映画祭の「ヨーロピアン・フィルム・マーケット」の会場はとんでもない熱気に包まれており、圧倒されました。あの空気感に触れられたのは何よりの収穫で、映画人たちがここから何かを生み出そうとする姿勢に刺激を受けました。

そもそも、ピッチング、という言葉すら知らなかった私の場合、企画書を作成するところから躓きがありました。三回にわたる事前講義において、二人の外国人講師の前でリモートによるピッチングを行いましたが、様々な点で指摘を受けました。映画のビジョンを具体的に持つこと、しかしそれを限られた時間内で端的に伝えること、自分の企画の強みはどこなのか、予算規模と現在の座組はどういう体制になっているのか。そして、一番重要なことは監督自身の伝えたい熱意であること。不安なまま現地でのピッチングが始まりましたが、多くの方が真剣に向き合ってくれて、こうした方がいいのでは？と時にはシナリオに助言をくれるなど、映画制作の始まりの場がそこにはありました。私の企画は、ヨーロッパに因んだ要素が二つあり、内容的にヨーロッパ撮影が出来うるストーリーラインがあったのですが、私は日本の映画制作の現実的なところで、無理だろうとハナから諦めていました。しかし、ピッチングに向き合ってくれた方々の中には、これはヨーロッパで撮影した方がいいと本気で訴えかけてくれた方がいました。映画表現におけるスケールの違いを感じつつ、良いものを作るためにそれがどうしたら実現し得るか、そのヒントが今回の事業で掴め、海外展開の可能性を感じました。

一方で、多くの方々にピッチングし、連絡先を交換し合い、数あるなかで今後は誰と具体的に話し合っていけばいいのかわからなくなった瞬間もありました。先々の難しさを痛感した思いもあります。しかし、いま振り返って思うことは、私自身が誰と一緒に映画制作をしたいのか。その為にマーケットという場があり、パートナーを見つける場であったのだと実感しています。

そして、本事業を通して、何より大切な出会いとなったのは、ともに日本から選抜された荒木伸二監督、串田壮史監督という二人でした。年齢も経歴も異なり、今回の派遣で初めて交流しましたが、映画への熱を共有しながら様々なことを学び合いました。日本にも同じ思いを抱えながら映画制作に臨んでいる方々が多くいるのだということ。まずは、そういった方々と手を取り合い、切磋琢磨することで見えてくる世界もあるのかもしれない。その場限りではなく、これからも交流を続けていきたいと強く思います。